

古筆嫌い

今西祐一郎

国文学研究資料館の今西です。私は、本日ご出席の三人の先生方とは違って、これまで研究対象として古筆に接したことがほとんどありません。『源氏物語』など国文学についての論文は書いてきましたが、古筆には縁がなく、これまで古筆に言及するような論文を書いたことがありません。そういう意味で、本日のシンポジウムにはまったくふさわしくないパネラーなのですが、ここ日野のお隣の立川市にある国文学研究資料館の館長として顔を出せという横井先生の仰せにしたがって、やってみりました。しかし、古筆あるいは古筆切について何かしゃべるように言われても、演題の付けようがないのです。

それで皆様のお手許のパンフレットには、私だけ演題がありません。これは印刷ミスではなく、私が演題提出の締め切りまでに題を提出しなかった結果で、今日お集まりの皆さん、そして実践女子大の関係者にお詫び申し上げます。なければなりません。そして悩みに悩んだ挙げ句、昨日になってやっと「古筆嫌い」という題を思いつきました。もともと「嫌い」といっても、見るのもイヤだという意味ではありません。「関心はあるけれども、なかなかその世界



(図 1)

に足を踏み入れることができず、くよくよしている」「そういう時に抱くアンビバレントな感情だとお考えください。

とはいえ、私も最近では古筆を見るものが多くなりました。先日は静岡県三島市の佐野美術館で寸松庵色紙、継色紙、高野切、石山切など、古筆の名品中の名品を見てまいりました。

私どもの国文学研究資料館でも、現在「物語の生成と受容」という、資料館の教員と外部の大学、研究機関の研究者との共同研究プロジェクトの成果を展示しています(二〇〇九年一月九日～二三日)。その展示に、こちら実践女子大学が所蔵しておられる河内本『源氏物語』の古筆切を展示させていただきました。この河内本切は、私ども資料館でも教葉所蔵していますが、それはすでに学会周知の、尾州徳川家に勝るとも劣らぬ逸品です。それらを合わせ、さらに今日ご出席の田中先生はじめ、個人蔵の幾葉かをも拝借して一堂に集めました。なかなか壮



(図2)

観です(図1参照)。

私自身も「古筆嫌い」といいながら、少しは古筆切を持っています。ただし「嫌い」ですから、お金を払って購入したことはなく、人様から頂戴したものの少々、ここにお示しする伝正徹筆の南北朝期の拾遺集切などです。この四月に国文学研究資料館に赴任しましたら、出来たての建物は真新しくてきれいなのですが、およそ文化の匂いがしない。それで五枚ある正徹の拾遺集切を館長室の前の廊下に並べて掛けました。額に入れて廊下にぶら下げてあるだけですから、盗難の恐れがまったくないわけではありません。しかし今のところ健在です(笑)。

ただし、私の持っている古筆切は僅かですから、それだけでは足りません。それである時、中古文学会の委員会のあとで話半分に、資料館をより資料館らしくするために壁掛け用の古筆切の提供を話題にしたら、名古屋大学の高橋亨さんがさっそく応じてくださって、鎌倉前期の古今集切二葉を立川まで持

参してくださいました。現在は、それも壁に掛けてあります（図2参照）。有志に協賛いただいて、資料館の壁をコピーではなく実物の古筆切で埋めるのが夢です。

国文学研究資料館も今日ではある程度の古筆切を所蔵しています、館のホームページ上で「古筆切データベース」を公開しておりますし、平成一七年（二〇〇五）には館の編集で『古筆への誘い』という単行本も出しています。ですから、資料館としては今後も古筆切の収集に意を用いる必要があるのですが、「古筆嫌い」でかつ貧乏性の私は、どうも紙切れ一枚に何万円、何十万円を出すのはもったいないような気持ちを捨てきれないのです。

池田和臣先生が最近紹介された「蜻蛉日記絵巻詞書」の「玉津切」の記事のコピーが皆様のお手許に配布されています。それはまだ三点しか報告されていないものです。一つは出光美術館の古筆手鑑『見ぬ世の友』に、もう一つは京都国立博物館の手鑑『藻塩草』に貼られていて、三点目を池田先生が発見、紹介されたわけです。池田先生には国文学研究資料館が高額の資料を購入する際の評価委員をお願いしていますが、じつは先日、その件で資料館にいらした折、三点目の「玉津切」を資料館で購入しないかと勧められました。それで値段はいかほどかというところ、およそ四〇〇万円くらいだろうという。新出の断簡は四行ですから、一行一〇〇万円ということになりますね。自分のお金でもないのに、貧乏性の私はそれを買う決断はできませんでした。たった一枚で四〇〇万円というのは何か損をしたような気になるのです。

最近、資料館では古活字版の『後漢書』を二五〇万円で購入しましたが、これは大部な書物で、丁数は二千を超えるのではないのでしょうか。そういう量の多いものを買うと私はすぐく得をしたような豊かな気分になるのです。これが貧乏性で、そんな感覚でしか蔵書計画を実行できないようでは、国文学研究資料館長失格かもしれません。

*

さて、今日のシンポジウムのテーマにこじつけて話を古筆の問題に戻しますと、私たち国文学者が接する古筆の多くは和歌や物語といった和文です。そして、それらの原典はもともとは仮名で書かれていたと考えられます。そのことは、古来、紀貫之自筆本の忠実な写しと伝えられてきた、為家筆『土佐日記』の文字遣いを見れば納得できます。そこでは、原則として字音語以外、大和言葉は仮名表記です。

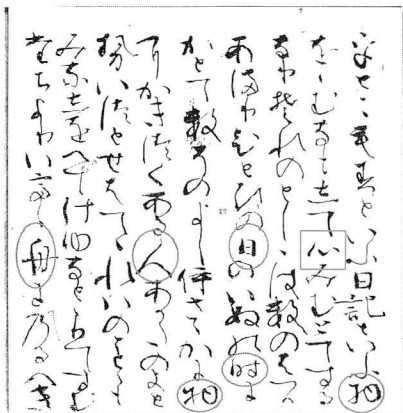
しかし、今日私たちが見ることのできる古筆は、『古今集』にしても、『伊勢物語』、『源氏物語』にしても、古くても平安末期、多くは鎌倉時代以後のもので、成立以後すでに二〇〇年前後を経て、何度も書写を重ねられてきた写本の一部です。したがって、書写の過程で書く側、読む側双方の要求から、本文にはある程度の漢字が宛てられるようになっていきます。

たとえば『土佐日記』でいえば、藤原為家は貫之自筆の『土佐日記』を忠実に、字の形まで模した書写なので、為家本にはさきほど申したようにほとんど漢字がありません。ただ、「日記」という語のように字音語で、当時は促音の表記法がないものは、漢字で書いていますが、そういう語以外はほとんどが仮名です（図3参照）。

その同じ伝貫之筆本をのちに為家の父、定家が書写します。ところが、定家は書写する際に、「人」、「舟」、「時」、「人」、「舟」など、多くの語に漢字を宛てていきます。

これは、現在の私たちが漢字仮名交じり文のほうを読みやすいように、仮名文字だけでは読みづらかったからだと思われまます。そういう便宜的配慮で定家は、一部を漢字に直して写したのだと思われまます（図4参照）。

なお、定家はそれだけでなく、本文も書き換えているのです。冒頭の「おとこもすなる」という部分が「男もすといふ」となっています。いわゆる「伝聞・推定」の助動詞「なり」を「といふ」という、わかりやすい形に改めている。それから「してみむとてする」という箇所を「して心みむとてする」と直しています。この定家の書写態度はな



(図4)



(図3)

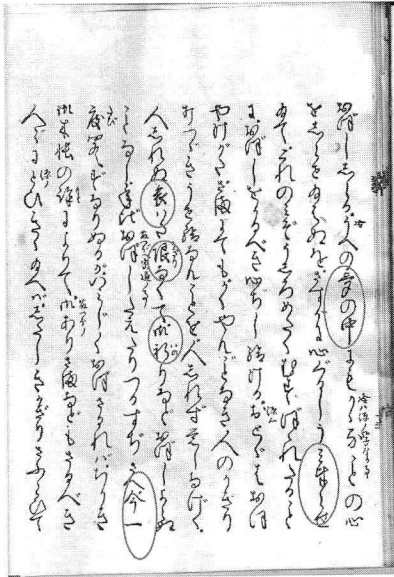
かなか興味深いものですが、今日は深入りしないことにします。

さて、最初にご紹介したように、国文学研究資料館では、現在、鎌倉時代の河内本『源氏物語』の古筆切をまとめて展示しています。それは鎌倉時代の古筆ですから、さきほど申したようにある程度の漢字表記は見られますが、それでも、それ以後、すなわち室町時代の写本や江戸時代の版本に比べれば、漢字は決して多くはありません。

実践女子大学蔵の図5で見ると、「ゆめのうち」「みたてまつらせ」「あはれ」「かぎり」「いのり」「いまひとたび」などは仮名で「哀」「限」「祈」「今一度」といった漢字を交えた表記になっています。こういう漢字表記は、江戸時代になって始まったのではなく、すでに室町時代の写本などでもたぶん見いだされると思えます。

しかし、同じ箇所を、河内本の代表として重んじられてきた尾張徳川家本で見ると、実践女子大学蔵断簡と同様、仮名で書かれています(図7参照)。字体の違いや新旧は私にはわかりませんが、この両河内本は、ともに仮名中心の古体の表記を示している

絵入源氏物語



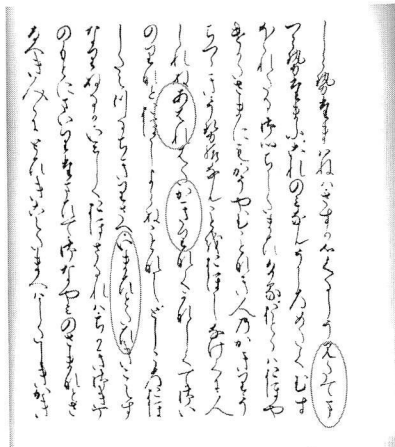
(図 6)



③ 文芸資料研究所蔵 一

(図 5)

尾張徳川家蔵 河内本



(図 7)

点で、共通しているといえるでしょう。

*

『源氏物語』は五四帖という膨大な作品なので、その書写も一人ではなく複数で分担することが多い。したがって、書写における漢字と仮名の割合も、個人差の反映でしょうか、巻によって異なります。

次の表は、今日校注書の底本に広く用いられている大島本を主とした『源氏物語大成』の本文篇による、「あはれ」の漢字表記の一覧です。大島本は室町期に書写された本ですが、『源氏物語』で千以上ある「あはれ」という語を、「哀」と漢字で表記した箇所は多くありません。わずかに、図5に示す二箇所だけです。

0441-11 明	へき	しつのお	の	むつまじう	〈哀〉	におほさ	るる	も	われ	なから
0441-14 明	袖	うちぬらし	波ま	なき	ころ	〈哀〉	に	かなしき	事とも	かきあつめ
0446-02 明	る	こちして	空	の	雲	〈哀〉	に	たなひけり	年比	夢の内
0446-04 明	たすけ	に	かけり	給へ	ると	〈哀〉	におほす	によく	そ	かかるさ
0453-06 明	たてまつる	人も	やすからず	〈哀〉	に	かなしう	おもひあへり	かう		
0454-08 明	たる	は	たか	門	さして	と	〈哀〉	におほゆ	ねも	いと
0457-12 明	の	ちきり	に	こそ	は	と	〈哀〉	になむ	なとかは	かく
0464-05 明	し	とおほし	やら	るる	に	物	〈哀〉	なり	三昧	たう
0467-04 明	かすめ	給へ	る	を	いと	〈哀〉	に	うちを	きかたく	み
0469-03 明	や	あり	けむ	あり	し	より	も	〈哀〉	におほし	て
0469-09 明	て	月	も	たち	ぬ	程	さへ	〈哀〉	なる	空

- 0470-12 明 かひなき うらみ たに せし〈哀〉に うちなき て ことすくななる
 0472-11 明 なきさ を わかるる こと なんと〈哀〉かり て くちくち しほたれ いひ
 0473-13 明 いみしう 物を〈哀〉と おほして 所所 うちあかみ
 0477-05 明 たる を かきりなく〈哀〉と み たてまつり 給 御さへも
 0477-07 明 て 御たいめんの 程 にも〈哀〉なる 事とも あらむ かし まこと
 1303-14 鈴 御心さし は すくれ て ふかく〈哀〉に そ おほえ 給 院 も つねにい
 1450-08 紅 は み たてまつら む のち そ〈哀〉に うしろめたけれ とよ を そむ
 1451-02 紅 さまかたち おもひやら れて〈哀〉に おほゆる 人の 御ありさま な
 1457-09 紅 梅 は おひいて けむ ねこそ〈哀〉なれ 此(の)宮 などの めて
 1721-06 宿 て おはする けしき いと〈哀〉也 中將 の まいり 給へる を き
 1726-02 宿 給 つつ きこゆる ままに〈哀〉なる 御ありさま と み つる を

単に数が少ないだけではありません。明石巻の用例が突出していることにお気づきになるでしょう。大島本は室町時代の飛鳥井雅康の一筆だと言われてきました。そうだとすると、一人の筆者が自らの判断で、明石巻だけに「哀」と漢字を使用するというのは不自然です。雅康が書写する際の元の本がすでにそうなっていたと考えるほかないでしょう。そうになると、大島本は、雅康書写以前の段階では、複数の筆者による写本、もしくは取り合わせ本だったと言うことになるかもしれません。

それはさておき、そのような大島本における「哀」の少なさに対して、江戸の『絵入り源氏物語』になると、「哀」の漢字書きは六〇〇例以上と、圧倒的に漢字表記が多くなります。

こういった漢字と仮名の多い少ないで、その伝本の古さや来歴などがある程度探ることができる、という面もあると思います。『源氏物語』の異文研究は、『大成』校異篇をもとに、近くは『別本集成』などによって、ずいぶん細かい点まで検討が加えられてきました。しかし『大成』校異篇が、漢字・仮名の表記の違いを無視した影響なのか、今申し上げたような、表記の違いが分析の俎上にのぼることは、あまりなかったような気がします。

別府先生のお話のように、字体の美の諸相を探るといった芸術的な作業ではありませんが、古写本における漢字表記、仮名表記の問題は、情報としてはいろいろな問題を孕んでいるのではないかと思ひ、「表記情報学」という研究領域を考えたところでは、漢字で表記されるか、仮名で表記されるかの比率を統計的な手法などを用いながら、様々な伝本について調査できれば、意外な結果が得られるかもしれません。

ただ、それを行うには各伝本について詳細な索引のデータを作らなければならないのですが、それは現在、ほんのわずかししか出来ていません。

現在あるのは、統計数理研究所で作った『大成』本文によるもの、伊井春樹先生がお作りになった校訂本文によるもの、それと国文学研究資料館で作った『絵入り源氏』の画像データベースも、表記用例の検索ができますが、それくらいしかありません。『源氏物語』の古写本は相当な数に上ります。それら各本のデータベース化が必要なのです。前途ほど遠し、ではありますが、それに加えて、『源氏』の古筆切もまた重要な分析対象ではないかと考えています。